

エレミヤ書3章8－13節 「二人の女、二人の息子」

1A ユダの裏切り 8－10

1B 自分への偽り

2B 頑張りの従順

3B 父の愛への不信

2A 背信のイスラエル 11－13

1B 神の正しさ 11

2B 神の恵み深さ 12

3B 忘れない過去 13

本文

私たちの聖書通読の学びは、エレミヤ書3章の初めの部分まで来ました。前回、1章から3章5節まで読みましたが、今日は午後礼拝で3章6節から5章まで読みたいと思っています。今朝は、3章8節から13節まで、読んでみたいと思います。

8 背信の女イスラエルは、姦通したというその理由で、わたしが離婚状を渡してこれを追い出したのに、裏切る女、妹のユダは恐れもせず、自分も行って、淫行を行なったのをわたしは見た。9 彼女は、自分の淫行を軽く見て、国を汚し、石や木と姦通した。10 このようなことをしながら、裏切る女、妹のユダは、心を尽くしてわたしに帰らず、ただ偽っていたにすぎなかった。…主の御告げ。…」11 主はまた、私に仰せられた。「背信の女イスラエルは、裏切る女ユダよりも正しかった。12 行って、次のことばを北のほうに呼ばわって言え。背信の女イスラエル。帰れ。…主の御告げ。…わたしはあなたがたをしからない。わたしは恵み深いから。…主の御告げ。…わたしは、いつまでも怒ってはいない。13 ただ、あなたは自分の咎を知れ。あなたは自分の神、主にそむいて、すべての茂った木の下で、他国の男とかってなまねをし、わたしの声を聞き入れなかった。…主の御告げ。…」

二人の女が出てきます。背信の女と呼ばれるイスラエルと、裏切りの女と呼ばれるユダです。これは、ソロモンの死後、北と南に分裂したイスラエルの国のことを指しています。十部族がヤロブアムを王とする北イスラエルとなり、ユダとベニヤミンが南ユダ国となりました。エルサレムは、ユダとベニヤミンの境にあり、そこに神の宮があり、人々はそこに行って神を礼拝していました。けれども、ヤロブアムは自分のところにいる人々がユダに行って、そこで神を礼拝したら心が、北イスラエルから離れるのではないかと惧れて、それで北イスラエルの南にあるベテルと、北にあるダンに祭壇を造り、そこに金の子牛を据えました。ヤハウエなる神を拝んでいると言いながら、実体は金の子牛を拝むという偶像礼拝の罪を犯していました。ヤロブアムの後の歴代の王も同じように、この罪を続けて、ついに紀元前722年、アッシリヤによって捕え移されました。

ユダは、この出来事を目の前で見ました。ところが、ヒゼキヤの死後、マナセがイスラエルが行なってきた偶像礼拝をユダとエルサレムの中でも行なうようになりました。けれども、彼らはエルサレムにおいては、その神殿においていけにえを捧げ、形式としては神に礼拝を捧げていたのです。それと同時に、神殿の敷地やユダのあらゆる所で、偶像を据えて偶像礼拝を行っていました。ですから、神はご自分を夫に例え、彼らを女に例えました。北イスラエルについては、「背信の女」と呼びました。つまり、神ご自身から離れ、全く別の神々を拝んでいたのです。南ユダについては、「裏切りの女」と呼ばれました。なぜなら、結婚生活をしている体裁を取り、自分は神に結ばれ、神に仕えていると言いながら、他の神々にも仕えて、霊的に姦淫の生活を送っていたからです。

1A ユダの裏切り 8-10

エレミヤが預言を始めたのは、ヨシヤ王の治世第 13 年目のことです。彼は 8 歳で王となりましたが、ヨシヤがまだ 20 歳から 21 歳の頃のことです。そして、ヨシヤはその 5 年後、第 18 年に、神殿の修繕工事をさせました。その時に律法を発見して、それを読んで心を引き裂いて泣き、自分たちがとんでもない罪を犯していることを知りました。そして神殿の中の偶像を取り除く作業をしました。そこから大規模な宗教改革が始まったのです。しかし、民の心は完全に付いていきませんでした。まだ、偶像を慕う心が残っており、ヨシヤの宗教改革の流れに表面的には乗りながらも、なおのこと偶像を拝んでいたのです。

1B 自分への偽り

そのことが書かれているのが 8 節から 10 節です。北イスラエルは、神が離婚状を出したと言っていますが、それはアッシリヤに捕え移されたことを意味します。けれども、ユダは偶像礼拝を行ない、そして 10 節を見てください、「**妹のユダは、心を尽くしてわたしに帰らず、ただ偽っていたにすぎなかった。**」と言っています。ここでの問題が二つ書かれています。一つは、「心を尽くしていない」という問題です。そしてもう一つは、「偽っていた」ということです。心を尽くしていないとは、主への従順が中途半端だということです。そして偽っていたというのは、自分は神に仕えていると他者に対しても、また自分自身に対しても偽っているということです。いや、神に対してでさえ、自分は神に仕えていると偽っています。

2B 頑張りの従順

ところで私たちは、先週の火曜日と水曜日、カルバリーチャペル日本カンファレンスにて、大きな恵みを受けました。そこでのテーマは、「神が愛されたから」であります。英語では、「神がまず愛されてから」となっており、これがとても大事です。私たちが神を愛したのではなく、まず神が愛されたから、私たちも神を愛しています。そして、カルバリーチャペルの西東京の牧師、山東さんが、「神のことばを愛する」という題名で話してくださいました。神の言葉に従うということについて、御言葉に従うのは神の愛を知っているからこそできるのだ、ということをお話していました。神が愛しているということを感じているので、あの取税人のザアカイのように、悔い改め、主の命じておられることをすることができると話していました。そしてローマ 8 章に書かれていますが、肉は神に従う

ことができないし、喜ばせることもできません。7章に書かれているように、自分では憎む罪や悪でさえ、それを行ってしまう弱さを持っています。

したがって、「頑張り~~で~~従順になれば、肉や罪はそのまま残ったままになる。」ということになってしまいます。御霊によって肉の行ないを殺していないので、表向きは従っているように見えても、罪はそのまま残ってしまっています。神の命令について、しばしば教会でこんな言葉を聞きます。「私、まだまだなんで。頭では分かっているけれども、まだ人を赦せていない。」これは、自分の力で御言葉を守ろうとしてしまっているから、ということであります。¹

これがつまり、ユダの国で起こっていたことであり、また新約時代のユダヤ人たちの中で起こっていたことであり、そして私たちキリスト教会でも起こることなのです。頑張りによって御言葉に従おうとしたところで、そこに心が伴うはずがなく、必ず中途半端になります。神に愛されているという安心のない、神の御霊に触れられていない心で従ったところで、その心は苦しくなるばかりで、従うことができません。その化けの皮がはがれてしまうのです。化けの皮というのは、すなわち偽善です。イエス様が、律法学者やパリサイ人に何度となくその言葉を使われました。ギリシヤ語で「偽善」を示す言葉は、仮面を被っている状態を元々は意味しています。見せかけのものになってしまいます。

ここエレミヤ書においては、二人の女に主はなぞらえましたが、福音書においては二人の息子のたとえが出てきます。マタイ 21 章 28-32 節を読みます。「28 ところで、あなたがたは、どう思いますか。ある人にふたりの息子がいた。その人は兄のところに来て、『きょう、ぶどう園に行つて働いてくれ。』と言つた。29 兄は答えて『行きます。おとうさん。』と言つたが、行かなかつた。30 それから、弟のところに来て、同じように言つた。ところが、弟は答えて『行きたくありません。』と言つたが、あとから悪かつたと思つて出かけて行つた。31 ふたりのうちどちらが、父の願つたとおりにしたのでしょうか。』彼らは言つた。「あとの者です。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国にはいつているのです。32 というのは、あなたがたは、ヨハネが義の道を持つて来たのに、彼を信じなかつた。しかし、取税人や遊女たちは彼を信じたからです。しかもあなたがたは、それを見ながら、あとになつて悔いることもせず、彼を信じなかつたのです。」

ここに、二人の息子がいますが、父の命令に対して、ぶどう園で働きに行く、と言つているのに行きませんでした。この兄は、自分の肉の力で神の命令に従おうとしている人の姿です。行くと言つているのですが、肉はそれを行うことができません。頭では分かっているのですが、できないのです、と言つているわけです。けれども、弟息子は初めから、「行きません」と言つています。初めから、父の命令に従つていなかったのです。けれども、この息子は後で悔いたのです。それで、父

¹ <http://www.ccjconference.org/audio/ccjc2016/session2.mp3>

の言われることをしました。悔いたということは、父の愛に応答したことに他なりません。

3B 父の愛への不信

そして、さらにイエス様は、この喩え以上にもっとはっきりと、分かり易く話してくださったのが、あの有名な放蕩息子の話です。弟息子は財産の分け前を父の生前の時に受け取り、遠い国にいてそれを散財しました。完全に財が尽きて、そこで豚の世話をして腹を空かせている時に我に帰り、天に対して、父に対して罪を犯したと言って、それで父の家で、息子の資格はないけれども、僕として働かせてほしいと憐れみを請います。父は、彼をずっと待っていました。そして彼を見ると、走り出して彼を抱き、何度も口づけしました。そして父は、息子のために最も良い服を着させて、手には指輪、足は靴を履かせました。そして大きな祝宴を開いたのです。

けれども畑仕事をして家に帰ってきた兄息子は、戻ってきた弟のために祝宴を開いていたのを知って、家に入るのを拒みました。このすごく怒ったのです。なぜか？彼はこう言っています。「ご覧なさい。長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません。(ルカ 15:29)」彼は、父の愛について不信を抱いたのです。これだけのことをしたのに、あなたはご褒美をくれませんと言っています。この姿は、まさに私たちが頑張り神の命令を守ろうとしている姿です。自分が神の命令を守るのは、「何か悪いことが起こらず、祝福を受けるためだ」と考えて、守ろうとしていることがどれだけあるでしょうか？それが、パリサイ人や律法学者の姿勢でした。しかし、彼は最も大事な部分、つまり父が自分を愛していること、神の愛を受け入れていなかったということなのです。

愛されようと何かをすることこそ、私たちの問題の根本を表しています。自分が何物であるかのように認められようとする、これこそが自己義認であり、パリサイ的であります。神は、すでに愛しておられるのです。神は愛なのです。神は愛しておられることを信じ、受け入れること。このことによって、聖霊によって心が新たにされ、その柔らかくなった心は神を愛したいと願い、神の命令に従います。

2A 背信のイスラエル 11-13

そこで次に、「背信のイスラエル」を見ていきたいと思えます。表向きは明らかに、ユダよりも偶像礼拝にはまって、まるで異教徒のようになってしまった人々、神から遠く離れてしまったような人々ですが、かえって彼らに神は、回復を約束してくださっています。

1B 神の正しさ 11

まず 11 節で、「**背信の女イスラエルは、裏切る女ユダよりも正しかった。**」と言っています。これはなぜでしょうか？彼らが自分たちに何もないことに気づき、その心の貧しさをもって神に近づこうとしているからです。

ここで知るべき人は、神殿の中に入らなかった取税人です。神殿の中でのパリサイ人の祈りをまずご紹介されました。「ルカ 18:10 ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」そうです、主が見ておられる正しさの基準は、自分が正しいと認めてもらうのではなく、神こそが正しい方だと、へりくだって、この方の前でひれ伏すことです。

2B 神の恵み深さ 12

そして次に、神の恵み深さに信頼することです。12節にはこう書いてありますね。「**背信の女イスラエル。帰れ。主の御告げ。わたしはあなたがたをしからない。わたしは恵み深いから。主の御告げ。わたしは、いつまでも怒ってはいない。**」つまり、先ほどから話している神の愛に触れられるということです。私はエレミヤ書を、信仰をもって間もない時は、神が怒っている方なのだという表面的な読み方をしていました。けれども、今回改めて読んでいって、どう考えても、神が私たちを見捨てているのではなく、私たちが神を見捨てているので、それでご自身から離れてしまっているユダの民に叫んでおられる、と読んだほうが正しいのです。主は罪に対して怒っておられますが、それは罪がご自分とその人を切り離すがゆえに怒っているのであって、罪を犯している人々に怒っているわけではありません。

再びカンファレンスにおいて、カルバリー鎌倉の牧師ジャック・ベルさんが話していました。「自分が何かの罪や試練に勝利して、『ああ、主が助けてくださった。主の愛を感じる。』』というよりも、自分が再び失敗して、どうしようもなく自分に失望、絶望している時に、それでも主がそこにいらっしゃるということを知って、その時に神の愛の本質を知る、というようなことを話していました。それは、罪をだから犯してよい、というような陳腐なものではありません。神こそが愛であり、そこから愛が流れ出ているということを私たちが学んでおり、自分の頑張りでは罪に勝てない、神の御霊の愛が力なのだということを知るための訓練だと言ってよいでしょう。神の良さ、恵み深さ、その愛を知るからこそ、私たちは心を尽くして、この方に全てを明け渡すことができ、その献身こそが本物であり、悔い改めの実を結ばせる原動力となるのです。

3B 忘れない過去 13

そして、神の恵み深さを知るのに忘れてはいけないことは、「自分がどこから救われたのかを、思い出す」ことでもあります。「13 **ただ、あなたは自分の咎を知れ。あなたは自分の神、主にそむいて、すべての茂った木の下で、他国の男とかつてなまねをし、わたしの声を聞き入れなかった。**」自

分が行なっているすべてのこと、それが神の恵みによるものであり、神の恵みによって生きるためには、自分がどこから出てきたのかを思い出すことが必要です。あのパウロが、そのことを次のように言っていました。「1テモテ 1:15-16」キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。」自分が罪人の頭であるという意識がパウロにはありました。しかし、それは罪に今も責められることではなく、むしろ、神の慈しみと恵みの大きさに驚いて、神を恐れかしこんでいる姿です。

皆さんに知っていただきたいのは、私たちは神の恵みの前でみなが同じところにいる、一つなのだということです。カンファレンスでは、全てが終わり、聖餐にも預かった後で、三人一組で祈りましょうという勧めがありました。直ぐ近くにいたのは、ジャック・ベルさんと、カルバリー府中の牧師リッチ・ローズさんでした。私たちはありったけの思いを込めて、祈りました。ジャックさんが、祈りの後で、こんなことを言ってくれました。「リッチは、本国で運転免許を剥奪されるほどの過去を持っているんだよな。そして清正は、抑鬱になってしまった過去がある。そして僕にも、また違った過去がある。そんなところから救われて、今ここにいるんだ。そして、全然違う背景の僕たちが、ただ救われたということで、神の恵みによって仕えているということだけで、一つの交わりに入っているんだよなあ。」そうなんです、それぞれが惨めな過去を持っています。

けれども、神がこんなどうしようもない者を救ってくださって、その恵みを証しするために立てられています。これは、へりくだらせることです。自分はそれ以上、もっと良い人間になって、まともになりたいと思っても、神はそれを拒まれます。主は、私の良さではなく、神の恵み深さとすばらしさを証ししたい、啓示したいと願っておられて、ご自分の国をこのような弱い者たちの集まりの中で広げられるのです。私たちは、低くなりましょう。何も競争する必要はないし、ただどうしようもないところから、それぞれが神の憐れみによって救われた者たちです。けれども、神はこの上もない憐れみによって、私たちが大好きで仕方がなくて、私たちを立てて、教会として生かしてくださっています。そしてイエス様が私たちの真ん中に生きておられるのです。